

宮甲一

明治廿五年六月四日

内閣書記官



内閣總理大臣

奏

内閣書記官長



謹ヲ案スルニ本邦華族ノ制度タル特種ノ起原
ヲ有シ常ニ皇家ト其聯脈ヲ有セサルハナク泰西
貴族ヲ以テ一ノ公益獎勵ノ具トナシ別ニ門地ノ慣
制ヲ有セサルモノト素ヨリ同日ノ論ニアラス明治
十七年授爵ノ
聖詔ヲ稱誦スルニ

朕惟フニ華族勲貴ハ國ノ瞻望ナリ宜シク授ク
ルニ榮爵ヲ以テ用テ寵光ヲ示スヘシ文武諸
臣中興ノ偉業ヲ翼賛シ國ニ大勞アル者宜シ
ク均シク優列ニ陞シ用テ殊典ヲ昭ニスヘシ茲ニ
五爵ヲ叙テ具有禮ヲ秩ス卿等益ス爾ノ忠
貞ヲ篤クシ爾ノ子孫ヲシテ世々其美ヲ濟サ
シメヨ
ト之アリ「華族勲貴ハ國ノ瞻望ナリト云ヒ中
興ノ偉業ヲ翼賛シ國ニ大勞アル者ト云フ盡
ク門地ト

皇家トノ相聯繫スルヲ表示スルノ
聖旨ニアラサルハナシ將來ニ於テ本邦ノ慣例
ヲ破リ泰西ノ貴族制度ノ一部ヲ採用スルノ可
否ハ現今尙ホ未定ノ問題ニ屬セリ此問題未定
今日ニ於テ一新例ヲ開クニ類似スルノ舉ハ深ク之
ヲ考ヘ其得失ヲ考察セスルハアルヘカラス
別冊伊達邦成外一名ノ如キ舊來ノ名家ニシテ
加フルニ維新ノ際順逆ヲ論スルノ功勲アリ之ニ累
ヲルニ拓地ノ功績ヲ以テス特ニ榮族ニ列シ授爵
ノ上奏アル者ヨリ其所ヲ得タリト雖モ其華族ニ

列セラル、ノ辭令ヲ見ルニ單ニ國益ヲ興スノ功
績ヲ賞シ云々ト有之是レ衆庶ヲシテ榮爵ハ國
益ニ對スル賞酬タルヤノ觀念ヲ生セシメ上
皇室ノ藩屏ヲ輕視シ從來華族ニ對スルノ意
想ト大ニ相反スル結果ヲ生セシムヘキナリ且ツ聞
ク所ニヨルニ當局項日華族令ノ起草アリ而テ
其公益ヲ起ス者ニ授爵スル規定ヲ設クルノ可否
ニ關シテハ頗ル議論アリト是レ正ニ然ルヘキ所ナリ
然ルニ今此ノ如キ辭令ニヨリ華族ニ列セラル、コト
アラハ是レ議論中ニ係ル重要事項ニ強盛ノ

先例ヲ與フルモノニシテ其關係ナル所頗ル大
ナリト云ハサルヘカラス依テ左案ノ通宮内大
臣、御回答相成可也哉

宮内大臣、回答案

伊達邦成外一名華族ニ列セラレ授爵
ノ件上奏可相成ニ付御照會ノ趣ヲ承
知御主旨ニ於テハ異存無之候得共辭
令文ニ於テ國益ヲ興スラ賞シテ華族ニ列
セラルト有之候ハ新例ニモ有之不穩當ニ可
有之ト存候間右辭令文更ニ御詮議相

成俣様致度此段及仰面答候也

明治廿五年六月廿七日



伊達邦成外一名華族

被列校書相成度方也

海通施長官ヨリ上請
之趣以先收書類
御返附相成候旨爲
取調候末別紙之用
上奏可致有者別
御意見是爲之致
後也

後方也

三月三日

土佐大臣

松方内閣總理大臣殿

北^三甲二〇

明治廿四年四月廿日

内閣書記官

内閣總理大臣

内閣書記官長

官内大臣、照會案

別紙伊達邦成及伊達邦直ノ華族、被
列度ノ件北海道廳長官ヨリ上清候ニ付
書類及御送付候也

明治廿四年四月廿日

總理大臣

宮内省
事務課
丙第六五號

従来授爵手續之義御間合之
處者、若くは予別後内閣、内儀
既内親王、若くは同右様在、若く
有王、復授給後乃生、若くは也

明治三十四年二月七日

宮内省准伯耆守井内寅

内閣書記長岡田公事殿

馬内四

明治廿四年一月廿八日

内閣書記官長

内閣書記官

宮内次官、照會案

從來御有ニ於テ授爵セラルヘキ者有之
候節、其時々内閣、御内儀相成後内規
等指之儀我々、別段右等ニ付手續ハ一
切無之儀我々、内閣致置タル間此段
及御向合由也

河内守了俊

由良守俊官長

陽